

現代日本における海岸マツ林の環境保全活動に関する地理学的研究

近藤, 祐磨

<https://hdl.handle.net/2324/4474903>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	近藤 祐磨			
論 文 名	現代日本における海岸マツ林の環境保全活動に関する地理学的研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	今里 悟之
	副 査	九州大学	教授	遠城 明雄
	副 査	九州大学	准教授	岩崎 義則
	副 査	広島大学	教授	浅野 敏久

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、現代日本の地域社会における環境保全活動の発生から変容に至るメカニズムを、海岸マツ林を事例としたフィールドワークに基づいて詳細に分析し、地域のガバナンス（協治）における環境保全活動の役割を解明しようとしたものである。全体は8章構成であり、第1章の序論では、保全活動団体が「行政の下請け」に陥らないためにどのような立場や戦略を採り得るのか、活動に関わる様々な主体が持つ価値観や目標の齟齬や妥協とはどのようなものか、といった着眼点が述べられる。主な研究方法は、地域住民や行政関係者などへの聞き取り、海岸林における保全活動現場と植生などの観察、新聞記事や行政文書類の分析である。

理論編は2つの章から成る。まず第2章では、現代日本の環境保全活動が、前史となる社会運動としての環境運動との関わりから歴史的に位置づけられた上で、国内外の地理学および隣接分野の既存研究が批判的に検討され、ネットワークとスケールという2つの重要概念の有効性が示される。次に第3章では、日本における海岸マツ林の生活上の役割と、保全に関わる社会的な争点が整理された後、里山や棚田と比較した場合の海岸林の保全活動上の特徴が指摘される。

実証編は4つの章から成る。まず第4章では、福岡県糸島市の2つの保全団体を事例に、各団体の価値観や目標の違いに起因する行政との関わり方の相違が、保全活動全体の展開にどのように影響したのかが検討される。次に第5章では、福岡県福岡地方の3つの広域的な保全活動ネットワークを事例に、ネットワークを主導する3つの団体とそれらに参加する10の団体の動向に注目しながら、ネットワークの形成が各団体の活動内容や価値観に与えた影響が解明される。続く第6章では、佐賀県唐津市において保全活動が行政によって大規模に制度化された事例に着目し、NPO・住民・行政・学校などの様々な主体が具体的にどのように活動に関わり、制度化の結果、それぞれの価値観や活動の目標がどのように変容したのかが検討される。さらに第7章では、福岡県福津市の6つの地区を事例に、海岸林の土地所有形態（国有・公有・私有）が、各団体の活動内容の展開にどのような制約や影響を与えてきたのかが明らかにされる。

最後に第8章では、各章の知見が整理された後、保全活動に関わる諸主体間の価値観の相違、保全活動の行政からの自律性、ネットワーク形成とスケール戦略の在り方、環境ガバナンスにおける住民と行政の役割、という4つの観点から、本論文全体の結論が示される。

最終試験においては、論文全体のまとめや論述、既存研究の批判的検討、実証編の現地調査の成果などに関して、一定以上の水準にあると認められた。本論文は、地元に着目した丹念なフィールドワークに基づきながら、地域ガバナンスやネットワークといった観点によって、現代社会に

おける環境保護に関する新たな視座や知見を提示し，地理学および隣接分野における一定の貢献が認められる。理論編と実証編との厳密な繋がり，環境保全活動などの諸概念の定義や用法，実証編における様々な諸事実の理解や位置づけ方など，いくつかの点において今後さらに検討の余地はあるものの，論文調査委員4名の合議の結果，本論文は課程博士論文の水準に十分に達していると認定された。